

VAUX



Greg Daniels - guitar/keyboards // Joe McChan ñ drums // Ryder Robison ñ bass // Quentin Smith - lead vocals
Chris Sorensen ñ guitar // Adam Tymn - guitar

初めの一曲、「Set It to Blow」の、止む事なく連続するスリーコードギターの音がスピーカーから流れ出て、体に一撃をくらし、その様な音を予想していなかった聴き手の咽を掴み、頸静脈に爪を食い込ませた途端、Vauxの二枚目のアルバム、『There Must Be Some Way To Stop Them』が現在MTVの番組、TRL (Total Request Live)等で垂れ流されているような、水増しされた、軽いパンクの、頭の悪い、ニューメタルと言われる種類の音楽とは全く別物であるというのが明確になるだろう。真のロックンロールバンドとは、財布に格好よく繋がれた鎖、スパイク付きのリストバンド、そしてマニックパニックのヘアカラーが作り上げるものではなく、汗、インスピレーション、そして最も重要である“純粋な情熱”によって作られるものである。そして、このデンヴァー出身のハードコアな六人組は、それら要素をトラック一台分位大量に持っているのだ。端的に言うと、Vauxは“本物”なのだ。彼等は持っているもの全て、そして存在全てを自身が作り出す、激しくどう猛な音楽の、原子爆弾級のパワーを持つ一音一音にかけている。そう言った姿勢が彼等を他のバンドと差別化するのだ。

Vauxの創作への完全な献身は、ギターのアダム・ティムの地元のスケートショップの地下で、地味に練習をしていた六年前まで遡る事が出来る。それ以降、彼等はパンクのD. I. Y. 精神を忠実に守り、儉約し、資金を溜め、レコードを出す為に奮闘し(彼等の初めてのレコードは、もしかすると予言的な意味も込めてタイトルをつけられたかもしれない、1998年に出された、7インチ『To Write A Symphony』で、フルアルバムは2000年にリリースされ、批評家に絶賛された『Audible Narcotic』、自費でツアーを組み(大学に通いながらも)、そしてステージ効果として独自の目をくらすユニークな光のショーを構成してきた。(当初はVauxの非公式のローディー、そして照明の技術者としてバンドと関わっていたバンドのメンバーグレッグ・ダニエルズは、今でも毎晩ステージ上で照明の操作をすると同時にギターとキーボードを弾いている、、、まさしくD. I. Y. だ。)

このような、彼等の努力、そして表現の全てに対する細かい集中力は、時には彼等をへとへとに疲れさせた。特に2002年のワーブド・ツアーはきつかったと言う。しかし、彼等の立派な努力は常に報われた。「個人的には、Warped Tourの事は何も覚えていないんだよ、その期間は全く眠れなかったんでね！」とベースのライダー・ロビソンは笑う「毎晩夜は、朝一番のステージの設営に間に合うように480km~640kmほどの距離を車で走って次の目的地を目指したよ、そして日中は熱い太陽の下で商売用のテントを張るんだ。でも、最悪の状況にもなり得たけど、そんな事なくて、ものすごくいい感じだった。大変だったけど、その価値はあったからね。」

Warped Tourの間、Vauxは真昼間の午後の早めの時間帯に、全体の二番目の演奏というあまり好条件でない中に出場するバンドとして、まだあまり盛り上がっていない、無関心なフェスの観客の注意を惹かなければいけない、という誰もがひるんでしまいそうな、大きな課題を克服する必要性があった。さらに、法的な理由で、そのツアーの半ばに彼等はバンド名をEiffelからVaux

へと変更する事を強制され、新たなバンド名で、文字通り一から自分達を売り込むというもう一つの負担を背負わされた。しかし、新たに命名された六人編成バンドの三人ギターの迫力は、好奇心旺盛でうろついていた人々を他のバンドのテントから何人も惹き付けた。「僕達への全体的な反応は素晴らしかったよ」、とロビソンは熱く語る「人々は僕達のテントの横を通りかかる時、ふと足を止めて、“おおっとこれは何だ?”と言うんだ、で、そのまま残って観ていく。皆、僕達がライブに自分達の全てをかけている事を感じとってくれたんだ。キッズにとって、バンドを評価する上でそれはすごく重要な事なんだよ。」

そのツアーでの真昼間の演奏が、容易に証明する事が出来たように、感覚に鋭く訴えかける効果照明や、スモークの機械、そしてロビソンが時々試みるナッシュビル仕込みの子猫風に火を吹くパフォーマンスがなくても、Vauxのコンサートはそれだけで素晴らしいものであった。繰り返しになるが、彼等を他のバンドと差別化するのはいやほやり彼等の衰える事のない、音楽への献身的態度である。「僕達は本当にこの為に生きているんだ」とロビソンは強調する。「人々が僕達を観て興奮するのを見て、僕達も興奮するんだ、だからステージでは熱狂的に演奏してしまう。実際、あまりにも熱中し過ぎて体力的にギリギリの所までやるので、倒れたり、吐いたりした事は何度もあるよ。」

驚くべきことに、このエネルギーと激しさは、テープに録音されても失われる事はなく、アルバム、『There Must Be Some Way To Stop Them』はVauxのライブと同じぐらい目がくらむようなアドレナリンドライブを体験させてくれる。シアトルのロバートラングスタジオで、プロデューサージョン・グッドマン(手掛けたバンドは:Bikini Kill, Blonde Redhead, CIV, Catheters, Posies, Sleater-Kinney, Unwound等)と共に録音されたこのアルバムで、Vauxは、通常通りギリギリまで自分達を駆り立てる事によって、ダイナミックなライブのエネルギーを再現する事に成功した。連続して三ヶ月もの間曲を練習した後(「その期間はそれしかやらないと決めた」とロビソンは言う)14日間ノンストップで録音し、彼等の友人のバンド、Vendetta Redの家に寝に帰る以外はスタジオから出なかった。「レコーディングの過程はとにかく凄かった。三週間というとても短い期間に13曲も録音して、そのうち11曲もアルバムに入れる事が出来たんだ」とロビソンは明かす。「毎日、午前2:30まで作業して、かなりきつくて、大変な作業だったけど、でも全て報われたよ。」

ひょっとすると、ロバートラングスタジオという、神(スタジオの壁は手彫りの大理石で覆われていて、噂によるとイエスキリストの顔も彫られているらしい)あるいは、この場合こちらの方が適しているかもしれないが、この場所で最後のセッションをレコーディングしたNirvanaが宿っていると噂される環境自体がアルバムの生々しく、かつ洗練されたスタイルに影響を与えたのかもしれない。しかしながら、当然、シアトルのグランジ音楽はバンドの6人のメンバーが影響を受けている、幅広いジャンルの音楽の中のほんの一つに過ぎない。どれだけ幅広い種類の音楽を好むかどうかにについて聞くと、彼等が口にするのは、クラシックロック(ドラムのジョー・マクチャンは、「キース・ムーン・ジュニア」あるいは「ミニ・ジョン・ポーナム」と言われている)、SouthやMuseのようなブリットロック、Refused, Ink&Dagger, At the Drive-Inのようなインテリ系ハードコアバンド、そしてMTVで見えるような安っぽいゴミのようでない、「本当に上手いメタルバンド」等である。

それら音楽全ての影響を受け、内包した上で出来上がったアルバムは、耳の鼓膜を破き、頭蓋骨にガンガン響き、脈をドクドクと打たせ、鳥肌を引き起こす作品だった。それは、どんな音楽でもジャンル分けして、何らかのマーケティング手法に当てはめようとする現在の音楽業界の枠に当てはまらない新鮮なものだった。「僕達はパンクバンドでなく、またハードコアバンドでもない、どんな風にジャンル分けされたとしても、必ず言えるのは、これはとても激しく、また綿密に考えた上で作られた音楽だって言う事だ」とロビソンは熟考する。「僕達のCDを聴くと、何種類もの音があって、毎回新しい発見がある。」確かに彼の言う通りなのだ。「Fame」や「Ride Out Bitch」のように音が固く重なりあい、覚醒剤にヘルメットをかぶせて、塗ったペンキも思わず剥がれてしまうような曲もあれば、「Switched On」のような晴れた日にステロイド剤を打つ不動産屋のような不可抗力的な曲もある。また「At Your Will」や「Four-Cornered Lives」のようなRadioheadがナイフで喧嘩をした後に残る瀕死の過度なバラード風の物もあり、そして「Shot In The Back」の様な大つちハンマーを振りかざしたような、Metallicaのアルバム『Master of Puppets』風のアルバムの最終曲がある。この様にアルバム、『There Must Be Some Way To Stop Them』は聴く人全てにそれぞれが慣れ親しんでいる何かを与えると同時に、他に類を見ない音楽として仕上がっているのだ。

『There Must be Some Way To Stop Them』のリリースの後に、VauxはVendetta Red, Blood Brothers, The Used, A Static Lullaby, Boy Sets Fire, STUN, Coheed and Cambria, The Hope Conspiracy, My Chemical Romance等のバンドと共にツアーに出た。そして2003 Warped Tourに再び参加した直後には、今度はAndrew WKとツアーに出た。この様にアルバムのリリース後はノンストップでツアーに出る毎日という訳だ。

「僕達は、ほとんどのジャンルの音楽ファンを惹き付ける事に成功したと思ってる」と自慢げにロビソンは言う。しかし、オルタナティブプレスマガジンにより「2003年に注目すべきバンド100」の一つとして選ばれたVauxは、現在ジャンル別に別れてしまったロックの世界を、それぞれのジャンルのファンに訴えかける事により、ふたたび一つにし、征服するという使命をまだ歩み始めたばかりである。ゆるぎない信念をもって、ロビソンは言う「僕達は、とてつもない野心を持っているので、活動を続けていく。そしてやがてはやりたい事全てを成し遂げる事が出来ると思ってる。」もはや、彼等を止める事が出来ないのは明らかだ。

